



Title	側貌の歯科矯正学的評価に関する研究
Author(s)	山内, 和夫
Citation	大阪大学, 1966, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29000
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名・（本籍）	山	内	和	夫
	やま	うち	かず	お
学 位 の 種 類	歯	学	博	士
学 位 記 番 号	第	9	4	7 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 3 月 28 日			
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当			
学 位 論 文 題 目	側貌の歯科矯正学的評価に関する研究			
論文審査委員	(主査) 教 授 滝本 和男			
	(副査) 教 授 西嶋庄次郎 教 授 下総 高次			

論 文 内 容 の 要 旨

歯科矯正学の臨床では、治療方針の決定や治療結果の判定などを行なう場合に、側貌形態の客観的な評価が必要である。

しかし、側貌形態に対する判断を客観的に表現することはなかなか困難で、従来から、この問題に取りくんだ研究は数多くみられるが、いざ、われわれが、それらの研究結果を臨床的に応用しようとすると、つねに、その適応性の不十分さを痛感させられるのである。

このために、歯科矯正学の臨床では、患者の側貌形態の評価基準を顔のどこにもとめるべきか、あるいは、治療前後に関する側貌の形態的变化をどうすれば客観的に評価しうのかなどの重要な問題について、いまだに、十分な解答が与えられているとはいえない。

そこで、従来のこの種の研究が、どうして、いま一つ臨床的な適応性の面で不十分さを感じさせるのかということについて考えてみると、計測のための基準線の設定に問題があるために、目的とする形態の様相が十分に表現されていないとか、計測した角や距離が正常咬合者だけについてのものであり、その歯科矯正患者への適応性が確かめられていないなど、いずれにしても、計測しようとする項目の選択に関する問題があげられる。

著者は、この問題を考慮すれば、形態計測学的手段で、より臨床的に適応性のある側貌形態の評価法を提示できるのではないかと考え、正常咬合者と各種不正咬合者とを同時にとりあげ、次のような方法で本研究を実施した。

1. 満18才から満25才までの日本人女性で、正常咬合を有し側貌に異和感のないもの42名（正常グループ）と、Angle 氏の分類による class I, class II division 1, class II division 2, class III の各種不正咬合のいずれかに該当する歯科矯正患者40名（各不正咬合10名ずつ）との総計82名について撮影した規格顔面写真の透写図のそれぞれに、側貌の各部分の形態的表現の代表として適当であると

考えられる3本の基準線と13本の計測線とを設定し、これらの線がたがいに42種の角を計測した。

2. 計測した42種の角については、正常グループと各種不正咬合グループ別に、計測平均値、分散、平均の分散などを算出し、正常グループに関しては、これらの算出値と最大値および最小値から、基準線どうし、あるいは、基準線と計測線との交さのしかたを検討した。

3. 正常グループと各種不正咬合グループ間および各種の不正咬合グループ間の計測平均値の差については、計測項目ごとに有意性を検定（t-test）し、この結果より、42種の計測項目中、歯科矯正学の臨床的応用に有意と考えられる計測項目を選びだし、これら選出された計測項目について、正常グループの平均値と、計測値の分散の70%水準での信頼区間をしめす折線図表を作成した。

4. この折線図表に、各種の不正咬合患者2名ずつの歯科矯正治療前と治療後の計測値をplotし、折線図表による側貌形態の評価の臨床的応用を試みた。

研究の結果は次のとおりであった。

1. 正常グループで個体間変動の小さい計測項目が、かならずしも各種の不正咬合グループとの差異をよくあらわすものではなかった。

2. class II division 2 の不正咬合グループは、ほとんどすべての計測項目で、正常グループと有意差をしめさなかった。

3. 正常グループおよび各種の不正咬合グループ間の平均値差の有意性検定の結果から、全計測項目中より、歯科矯正学の臨床的応用に適すると考えられる16項目を選びだすことができた。

4. 選びだした16項目について作成した正常グループの折線図表を、歯科矯正患者に試適して、患者の側貌形態が、歯科矯正治療前に較べ治療後に正常グループのそれに近づくような変化をなしていることをしめす評価成績をえた。

論文の審査結果の要旨

本論文は、日本人成人女子について、規格顔面写真による側貌の形態的研究を行ない、新しい観点から種々検討を加えたものである。すなわち、側貌における基準線と各計測線とがなす42種の角度を計測し、この値を統計処理して、まず、正常咬合グループにおける値を定め、これと各種不正咬合グループとの差異を明らかにした。ついで、この比較結果にもとづき、24種の計測項目のうち各グループの特徴を知る上で重要と認められた16項目について、正常グループの折線図表をつくった。さらに、これを標準として、歯科矯正患者の治療前後の計測値を図表内にplotして検討を加えた結果、側貌の診断や治療による変化の判定に役立つことがわかった。

要するに本論文は、歯科矯正学における側貌形態の研究に関して、従来の方法に新しい道をひらき、その臨床的応用についてひとつの客観的な手がかりを与えたものであり、歯学臨床に貢献するところ大である。

この点において歯学博士の学位を受ける十分な価値あるものと認める。